

# 平成 24 年度事業報告書

平成 25 年 4 月 21 日  
一般社団法人日本左官会議

## 1 概況

日本左官会議は、平成 24 年 5 月 13 日、宮城県七ヶ浜で設立のための話し合いを開催、法人認証申請に必要な議決を行った。

平成 24 年 6 月 21 日、一般社団法人として認可され、平成 25 年 3 月 1 日には、公益社団法人として認可される運びとなった。

### 【定款に定める目的】

この法人は、太古から未来へと永続する土とともに生きる思想、そして高度で確かな左官技能を広め、そのことをもってわが国の建築文化及び職人文化の発展に寄与し、人々の健康で楽しく自由な住環境・生活環境の整備に貢献し、この国の風景を、各地方風土にふさわしく、人と自然がともに作りあげる美しい風景へと改善していくことに貢献し、また建築・土木の分野において、環境に負荷を与えず自然と共生する柔軟で合理的な発想に基づく技術を、伝統に学びつつも新しく創出していくことを目的とします。

### 【定款に定める事業】

- ① 確かな左官技能と左官文化を伝承・普及・発展させていくための事業（講座、セミナー、シンポジウム、学術集会、研究会、イベント、展示会、出版などを含む）
  - ② 若手職人や指導者を研修・育成する事業、及び研修・育成事業をおこなう他の団体を支援する事業（研修会、技術講習会、技術者の派遣などを含む）
  - ③ 国内・外の土や左官技術、また自然素材に関する情報や材料を収集し、分析し、保存し、データベースを制作し、提供する事業
  - ④ 左官技術を中心にして、自然と共生する建築・土木の技術を調査・研究・開発し、提案する事業、また実際の現場に即して立案・設計し、工事の実際施工を請け負う事業（助言、指導、コンサルタント事業を含む）
  - ⑤ 建築関連法案を研究し、左官の技術と左官文化、ひいてはわが国固有の建築文化や職人文化を守り、あるいはこれを再構築・発展させるための提案や提言をおこなう事業
  - ⑥ 伝統的建築物の修復・保全に関して、相談を受け、実現方法を立案・設計する事業、また工事の実際施工を請け負う事業、そして、修復・保全のために寄付を集めるなどの付帯する業務
  - ⑦ 土をよく知るための体験的・情操教育的事業（体験会、体験教室、観察会、見学会など、またその指導を含む）
  - ⑧ 研究・開発の拠点となり、また多くの人々が左官本位の建築や左官棟梁による建設現場や研究・開発の成果を見学し、宿泊して体験してもらえるような小規模な施設もしくは施設群を建設する事業、またその施設あるいは施設群を運営する事業
  - ⑨ 土と左官に関する国際交流事業（技術者・研究者の海外への派遣、国際的情報交換、国際的催し物の主催や協力などを含む）
  - ⑩ この他この法人の目的を達するために必要な事業、及び付帯する業務のすべて
- 2 すべての事業を、日本国内全域及び事業によっては海外において、おこないます。

## 【会員の状況】

顧問会員 7 名      名誉会員 3 名      正会員 22 名      準会員 10 名  
支援会員 22 名      賛助会員 4 社      (平成 25 年 2 月 28 日現在)

## 【役員などに関する事項】

議長	原田進	原田左研	
副議長	小林隆男	江州左官土舟	
副議長	挾土秀平	職人社秀平組	
総務理事	木村謙一	晴れやか美術計画	
事務局長	多田君枝	アイシオール	
理事	植田俊彦	総合建築 植田	
理事	宇野勇治	宇野総合計画事務所	
理事	小沼充	小沼工業	
理事	今野等	今野左官店	
理事	豊永郁代	アイシオール	
理事	西川和也	工房カズ	
理事	松木憲司	蒼築舎	
理事	山本忠和	山本工業所	
監事	松倉比佐子		すべて非常勤

## 2 事業期間

平成 24 年 6 月 21 日～平成 25 年 2 月 28 日

## 3 事業の状況

初年度は、会員を集めおよび広報と、唐獅子土蔵修復・保全に向けての準備などにあてられた。7 月には、sakanjapan としてドメインを取得、9 月、会員募集を開始、10 月、facebook、web サイトを開設した。本格的な活動を始める体制が整えられた。

### 【唐獅子土蔵プロジェクト準備】

唐獅子土蔵とは、岩手県一関市花泉町に 4 棟残る、入母屋屋根の上に唐獅子を載せた土蔵である。いずれも明治末期、気仙郡米崎村の左官・吉田春治（安政元年～大正 11 年）の手によってつくられたもので、その構成、造形、施工において類を見ないレベルであり、日本の左官技術の粋を集めた土蔵建築の最高峰と言っても過言ではない。この比類なき土蔵が、平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災により、大きな被害を受けてしまった。それでもなお往事の輝きは残されているが、このまま放置しておけば、消失してしまうことは明らかである。この素晴らしさを広く知っていただき、後世に伝えたい。そんな願いと使命感と情熱をもって、この保存修復に取り組むことが決められた。所有者と連絡を取り合いつつ、助成金を申請してすすめることになった。

12 月下旬、日本ナショナルトラスト「東日本大震災 自然・文化遺産復興支援プロジェクト」として助成金交付が決定（250 万円）、平成 25 年 3 月、芸術文化振興基金「伝統工芸技術・文化財保存技術の保存伝承等活動」として助成金対象に内定（350 万円）。

## 【国交省へのパブリックコメント提出】

法人化の直接のきっかけとなった「土壁真壁構造」が事実上、不可能となる法律改正の動きに対し、パブリックコメントが求められていたため、11月、一般社団法人日本左官会議議長名で提出した。\*付記1参照

## 4 理事会の開催状況

当該事業期間中、下記の通り、理事会を開催した。

7月10日 理事13名の出席により、第1回理事会を東京の日本左官会議事務局で開催。会員募集や今後の事業計画について討議。

2月5日 理事10名の出席により、第2回理事会をスカイプで開催。総会の開催を決議。

## 付記1 国交省に提出したパブリックコメント

〔項目：P.9 1-2(1) 地域の気候及び風土に応じた住まいづくりの確保の観点からエネルギーの使用の合理化に関する法律第74条に規定する所轄行政庁が認める場合〕

日本の伝統的な家づくりである「木舞土壁塗り内外真壁構造」は調湿、蓄熱効果ばかりでなく健康面での有効性も認められます。しかしながら、構造上、断熱材を入れることは不可能であり、はっきりとこれを「除外規定」として明記していただくことを切に希望します。

木で構造をつくって屋根を架け、柱の間に竹や葦で下地を組み、両面に土を塗って壁をつくる。日本では古来から、このようにして家をつくってきました。森林に恵まれ、粘土質の土が採れ、高温多湿で四季のある気候風土に適した、本当の意味でエコロジカルでサステイナブルな工法といえます。土壁に関していえば、防水性、防火性、気密性、装飾性を求めて、それぞれの地域や文化を映した技法が豊かに発達してきました。自然素材だけを使ってここまで技術が高められた例は、世界でも珍しいといえます。

さらに、左官職人の背景には、彼らを支える鍛冶などの職人、土、砂、石灰、藁、麻、海藻糊といった材料生産の仕組み、共同体による家づくりなどの体系がありました。戦後、建築が凄まじい速度で工業化、商品化されていくなかで、自然から得られた素材を扱い、経験と勘がモノをいう職人技術やその体系は急速に失われてしまったわけですが、そこには、受け継ぐべき文化、景観、哲学、感性があるはずで

ランニングエネルギーの低減のみならず、人間と自然環境の間で調和する持続可能な建築やものづくりを見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。ランニングエネルギーを削減することは重要です。しかしそれと同じように、もしかしたらそれ以上に大切なことを我々は次世代につなげ、残してゆく義務があると信じています。

ドイツでは、「伝統的な要素の保全」と「省エネルギー対策」のどちらを優先するかを協議し、場合によっては「伝統的な要素の保全」を選択する場合もあるという話を聞いたことがあります。漏水させない「土壁両面真壁」の施工には極めて高度で手間のかかる技術を要します。けしてどんな左官でもできるというものではありません。歴史的な地域・地区のみならず、景観を守り、発展させる重要な要素となっています。この構法を継承し、外壁面の土壁真壁を施工できる左官を育ててゆくことは我が国にとって重要であり、優先度の高いことであると考えます。実際には現在、「土壁真壁」の施工事例は少なくなっており、また、町家の道路面のみを土壁真壁にする事例が多いと思われます。それだけに、いま継承しておかなくてはならない技術です。もちろん付け柱として外観の真壁をイミテーションとして行うことはできますが、やはりそうではなく「本物」を造りつづけることに価値があることをご理解いただきたいと思います。

土壁真壁で断熱性が低下した分を、他の壁や屋根・床の断熱強化でリカバリーするという論理も  
ありますが、現実的には屋根にも断熱スペースがあまりないことから、難しいと考えます。

我が国の「土壁真壁」については、「伝統的な手法により建築され続けることに価値と必然性がある」という観点より、シンプルにこの壁面については外皮規制（UA 値の算定対象）から「除外」とすることが望ましいと考えます。

## 付記2 設立までの流れ

遡ると、「日本左官会議」は、和歌山白浜の「ホテル川久」の仕事のため、左官の世界に革新をもたらした職人、久住章氏（1948年生）によって全国から集められた腕利きの職人集団「花咲か団」を母体とする。1991年のホテル完成後も彼らの交流は続き、京都、名古屋、山口県長門、神奈川県箱根、福岡、新潟六日町など、それぞれの出身地で開かれる会には、花咲か団出身者以外の左官も呼ばれるようになった。

10年を経たころ、久住氏は「そろそろ後進にこの会を委ねる」といって、弟子である原田進氏らを指名した。その後、日田を皮切りに、高山、伊勢、滋賀などで、伝統建築や粘土山などの見学会、実技を含む講習会、他業界の講師によるセミナーなどを含む、持ち回りの会が開かれてきた。この日田の会で「日本左官会議」という名称が用いられた。

2008年大分県日田（原田進）、2009年岐阜県高山（挾土秀平）、2010年三重県伊勢（西川和也）

2011年滋賀県近江八幡（小林隆男）、2012年東京晴海・大江戸左官祭り<東京都左官職組合連合会平成会  
＝代表 原田宗亮＝、左官を考える会＝代表 植田俊彦＝と共催>（小沼充）

平成24年4月12日～14日で開催された大江戸左官祭りが「日本左官会議」法人化のきっかけとなった。研究会「科学的に見た土の家」の際に、宇野勇治さんから2020年までに省エネ法の改正が見込まれており、木舞を搔いて内外に土を塗った（断熱材なしの）真壁の家は作れなくなる可能性があるとの話しが出た。それに対し、左官としても伝統工法を守っていく方向で動くことはできないか、個人としてではなく、公的な団体として社会に提言していく方がよいのではないか、という声が上がったのである。

その後、東日本大震災で左官の至宝とも呼べるような建造物が被害を受け、取り壊しの可能性もあるということが分かり、左官の伝統工法を守ると同時に、左官の誇りであり貴重な史料である建造物の評価・保存なども大事な役割なのではないかという意見も聞かれた。

左官文化を広く社会に知ってもらい、この文化を守っていくことは、日々の仕事と同様に大事なことである。そこで、とりあえずこのメンバー（任意の集まりだった日本左官会議）を「法人化」していこう、という流れが生まれたのだった。

5月12日、宮城県七ヶ浜町で設立に向けての話し合いが行われた。ここで、一般社団法人、さらに公益社団法人を目指すことが決められた。このときの出席者が理事となった。

翌日、今野等さんの案内で宮城県雄勝町、岩手県南三陸町、陸前高田などの被災地をまわり、状況を目の当たりにする。最後に、岩手県花泉の唐獅子土蔵3棟を見学した。

1棟は修復済みであり、1棟は大きく被災、もう1棟はかなり原型はとどめているものの、このままにはしておけない状況であった。そのすばらしさに圧倒されると同時に、左官としてこの土蔵をなんとかしなければ、という思いを皆が共有し、日本左官会議の初めての事業は、唐獅子土蔵の修復、保全ということに決定した。